

Gismond of Salerne—死をもたらす Cupid—

大 芝 香 織

序論

1500-1660年の間に出版されたイギリスの演劇の中で Cupid が出演する劇は約70作品ある (Berger et al. 36)。そのうちの多くは仮面劇である。約70作品に Cupid が登場しているという事実は Cupid が初期近代イギリス演劇に馴染みがあったことを示している。Cupid が登場する劇で一番古いものは Thomas Preston 作の *Cambyses* で、1561年に出版されている。さらに、Jane Kingsley-Smith は、1500年から1660年の間にイギリスで印刷された、あるいは上演された (もしくは印刷され、かつ上演された) 劇における Cupid について詳細な解説をしている。彼女の論によると、Cupid は12作品の悲劇に登場し、そのうちの9作品では Venus を伴わず Cupid が一人で登場している。Venus が悲劇に登場するのは3作品のみであり、いずれの作品でも Cupid と一緒に登場しているという。また、Cupid が登場する12作品のうち4作品は劇中に組み込まれた仮面劇で登場し、残りの8作品では Cupid の行動は劇のメインプロットを助長しており、悲劇のエロスが求められたときはいつでも Cupid として演じられていたという (*Cupid* 69)。

Kingsley-Smith が取り上げた Cupid が登場する悲劇作品の一つに *Gismond of Salerne*¹ が含まれている。この作品における Cupid の役割はメインプロットを助長するどころか、Cupid が劇の登場人物たちの運命を支配している。

Gismond of Salerne は法学院の一つである Inner Temple の法学院の劇作家たちによって書かれた悲劇である。作者は、Roderick Stafford、Henry Noel、G. Al、Christopher Hatton、Robert Wilmot の5人がそれぞれの幕を担当して書いた。これは、1591年に *Gidmond of Salerne* の改訂版として Wilmot が出版した *Tancred and Gismund* のそれぞれの幕に署名があるこ

とにより証明されている。*Gismond of Salerne* は、1 幕を Stafford、2 幕を Noel、3 幕を Al、4 幕を Hatton、5 幕を Wilmot が担当していた。3 幕を担当していた Al は人物が特定できていない (Wiggins 23)。

さらに、上演された時期についても正確には特定できない。作品の執筆時期と上演は Wilmot が改訂した *Tancred and Gismund* の書簡の中で、*Gismond of Salerne* が24年前に書かれたと記されていることから、上演時期が推定されているからである。*Inns of Court (REED)* では上演場所と上演時期は Inner Temple Hall と宮殿で1565- 6 年あるいは1566- 7 年のクリスマスシーズンであると記されている (733)。しかし、E. K. Chambers は *The Elizabethan Stage* の中で、1567年に Elizabeth 女王が Greenwich にいたという証拠がないため、*Gismond of Salerne* の上演は1566年2月24日から26日の Southampton 伯爵と Mary Browne の結婚式で仮面劇と馬上武術試合と共に上演されたことを示唆している (Vol 3, 514, Vol 4, 82)。

法学院の劇作家5人は劇作を Boccaccio の *Decameron* の第4日目第1話を基に *Gismond of Salerne* を書いた。*Decameron* の第4日目第1話では、サレルノ公 Tancredi の一人娘である Ghismonda が夫を亡くし、未亡人として父のもとへと戻ってくる。若く、美しく、聡明な Ghismonda を父である Tancredi は再婚させる気にならない。父の意向を知った Ghismonda は宮廷で父に仕える身分の卑しい男、Guiscardo と恋に落ちる。Ghismonda は、Guiscardo と二人きりで会う手段を書いた手紙を蘆の中に入れ Guiscardo に渡す。手紙には、Ghismonda の寝室につながる洞窟への案内が書いてあり、Guiscardo は、手紙に従って Ghismonda の寝室へ行き、二人は密会する。しかし、ある日、Tancredi は娘がいない間に娘の寝室に入り、そこで眠ってしまう。Ghismonda は、自分の寝室に父がいることに気づかぬまま、Guiscardo を寝室に招き入れてしまう。目を覚ました Tancredi は2人が寝室にいるのを見て、あまりのショックに何も言えず、黙ったまま彼女の寝室の窓から外へと出る。しかし、自分の娘を侮辱した Guiscardo を許せず、召使たちに Guiscardo を捕らえさせ、殺してしまう。そして、Guiscardo の心臓を金の盃に入れて、Ghismonda の元へと届ける。恋人の Guiscardo を殺された Ghismonda は金の盃に入れられた Guiscardo の心臓に何度もキスを

し、金の盃に毒を入れ、Guiscardo の血とともに飲み干す。そして、Guiscardo の心臓を自分の胸の上に置いて息絶える。娘の死を知った Tancredi は二人の死を悼み、自分の残酷さを後悔する、という内容である。

Decameron と *Gismond of Salerne* の両作品には相違点はいくつかある。*Gismond of Salerne* では、Cupid が登場人物として登場すること、Gismond が亡き夫の死を嘆く場面があること、Tancred の Gismond に対する近親相姦的な愛情、Guiscardo が卑しい身分ではなく伯爵という身分に変えられていることである²。これらの相違点は法学院の劇作家たちが意図的におこなったと考えられている。法学院の劇には君主への助言や忠告を含むという特徴があったからである。

Gismond of Salerne と *Decameron* との間の相違点の中で、本稿では Cupid の存在に焦点を当てる。Cupid が劇中でどのような役割を担い、どのように表象されているのかを考察した上で、法学院の劇作家たちが *Decameron* をどのように解釈していたのかを論じたい。

1. Cupid の役割と表象

Gismond of Salerne が Boccaccio の *Decameron* と大きく異なっている点は Cupid が登場人物として描かれていることである。*Gismond of Salerne* の劇は Cupid の以下の独白から始まる。

Loe, I, in shape that seme vnto your sight
 a naked boy, not clothed but with wing,
 am that great god of loue that with my might
 do rule the world, and euerie liuing thing.
 This one hand beares vain hope, short ioyfull state,
 with faire semblance the louer to allure:
 this other holdes repentance all to late,
 warr, fiër, blood, and paines without recure.
 On swete ambrosia is not my foode,
 nor nectar is my drink, as to the rest
 of all the Goddes. I drink the louers blood,

and eate the liuing hart within his brest. (1. 1. 1-12)

この独白から Cupid の容姿、食べ物、飲み物がわかる。Cupid は、翼以外は何も身に着つけていない裸であり、恋人の血を飲み、生きた心臓を食べるというグロテスクな神として描かれている。この Cupid が神々のいる天から地上へと降り立った理由は独白の後半部分で語られる。

But now the world, not seing in these dayes
such present proues of myne almighty power,
disdaines my name, and seketh sondry wayes
to conquer and deface me euerie houre.

My name suppress to raise againe therefore,
and in this age myne honor and renome
by mighty act intending to restore,
down to the earth in spite now am I come.

And in this place such wonders shall ye here,
as that yo' stubborn and rebelling hartes
in piteous teres and humble yelding chere
shall sone be turned, by sight of others smartes. (1. 1. 49-60)

Cupid が地上へ降りてきた理由は自分の名誉を回復させるためである。その後、彼が宣言することは、Gismond に欲望を焼き付けることである。Gismond は 1 幕 2 場と 3 場では夫を亡くして嘆き悲しんでいるが、2 幕 1 場では叔母である Lucrece に父 Tancred に自分を再婚させるように説得してほしいと頼む。そして、2 幕 2 場では Lucrece は Tancred に Gismond を再び嫁に出すことを説得するが、Tancred は彼女の説得を拒否する。2 幕 3 場では Lucrece が Gismond に Tancred を説得できなかったことを告げている。Cupid が登場するのは 3 幕 1 場の冒頭であり、ここで、夫を亡くした Gismond が再婚を申し入れたことと、Tancred がそれを拒絶したことは Cupid の企てであることを明かす。

Gismond haue I now framed to forgett
her turtles truthe, and burne wth raging lust.
I made her doting father her denie

the wealfull wyuely state to tast againe,
 and (Iuno thus forclosed) I made to flye
 a thrilling shaft that perced her youthfull vaines
 with loue of Counté Palurine: and he
 doeth fele like wound sent frō my deadly bowe.

.....

Their death shall make the earth to know my might,
 and how it is farr better to obey
 my gentle hestes, than with rebelling spirite
 my wreking wrath and power to assay. (3. 1. 7-14, 21-24)

この独白からわかるように、Cupid は Gismond に矢を放った。注目すべきは Cupid の矢と弓は “thrilling shaft” と “my deadly bowe” と表現されていることである。彼の矢と弓が死の動因として使用され、さらには “Their death shall make the earth to know my might” というように恋人たちの死を計画している。Cupid は恋人たちが死ぬことで自分の力を地上に知らしめようとしているのである。

本来、Cupid の弓矢は恋人たちに恋心を抱かせるために使用されていた。しかし、*Gismond of Salerne* では Cupid の矢と弓は恋人たちに死をもたらすための道具として用いられ、Cupid は死神と同じ働きをしている。Cupid が死と関連付けられた過程について、Erwin Panofsky はイコノグラフィーの観点から、Kingsley-Smith は、エンブレムの観点から説明している。

Panofsky によると、古典美術において Cupid は盲目ではなかったという。Cupid の矢で射られた恋人たちが盲目的な欲望へと駆られるという文学的意味において盲目という認識はあったが、Cupid 自身が盲目であるということは稀であった。また、古典美術で描かれた Cupid の容姿は古典文学の記述に依拠していた。彼の所持品は松明あるいは弓矢であると考えられており、そのうちのつかあるいは両手に両方を持っている裸の子供であると考えられていた。(パノフスキー 188)。しかし、中世以降、Cupid は目隠しをされて絵画に描かれ、盲目であると考えられるようになった。この盲目や目隠しをされるクピド (Cupid) には特別な意味があった。Panofsky は盲目のクピ

ドについて以下のように解説している。

伝統的なイコノグラフィーの基準によれば、盲目であることはあきらかにクビドを倫理の世界の悪い側に置くことになる。(以下省略)「見ることができない」(肉体的もしくは精神的な意味での狭義の盲目)、または「他から見られることのない」(隠れた、秘密の、見えない)または「目や心を見ることから妨げる」(暗い、光のない、黒い)という意味のいずれに解釈されようと、盲目ということは、中世の一教養人^{モラリスト}の言葉を借りれば、「肯定的なものを何ら意味せず、否定的なもののみを意味し、盲目の人と言え、われわれは普通罪人と考える」のである。(パノフスキー 204)

ヨーロッパ中世世界において、盲目であるクビドは悪徳と関連付けられていた。さらに、中世においては、目隠しした死という概念があり盲目のクビドは死と同類となった(パノフスキー 210)。

14世紀において、クビドの盲目は明確な意味を持っていた。単純に目隠しをつけたりはずしたりすることにより、「クビド像は『聖なる愛』の擬人像から禁じられた『情欲』の擬人像へ、あるいはまたその逆へと変えられることもでき」(パノフスキー 225)、また、「よく知られたルネサンス型のクビド、この裸で『弓を持つ盲目の少年』は、訓戒の目的で作られた小さな怪物として、この世に生まれてきたものである」。(パノフスキー 225-26)

このように、イコノグラフィーの観点から、ヨーロッパにおいてクビド(Cupid)の盲目が意味する事柄がすでに悪徳、情欲、死と関連付けられていたことがわかる。また、裸で「弓を持つ盲目の少年」である怪物のクビドは *Gismond of Salerne* の Cupid の特徴と一致する。

Kingsley-Smith は、エンブレムの観点から、*Emblematum Liber* (1531) に収録されている 'De Morte & Amore' という Andrea Alciato のエンブレムがキューピッドと死神の区別を消すきっかけとなっていることを論じている。このエンブレムは Cupid と死神が矢を交換し、Cupid が若者たちに恋をさせようと矢を射ると、若者たちは死んでしまい、死神の犠牲者である年配者が恋をするというエンブレムである。Alciato のエンブレムが収められている *Emblemata* では性愛の擬人化である Amor (アモル) は若い子供

であり、裸、そしてカールをした髪の毛をしており、翼を持ち弓と矢を手に行っている。死の擬人化である Mors (モルス) は大人の骸骨で、時折、外套あるいは仮面を身につけているが、決して盲目でもなければ翼があるわけでも武装をしているのでもない。‘De Morte & Amore’ の視覚の融合は時を経て展開していくことになる (Kingsley-Smith, *Cupid* 65-66)。つまり、このエンブレムによって、Cupid の矢と弓が死をもたらずものと変化し、エンブレムにおいて、死の擬人化と本来性愛の擬人化であった Amor (Cupid) の視覚上の区別がつきにくくなったため、Cupid は死の擬人化にもなってしまったのである。

したがって、*Gismond of Salerne* における、Cupid の容姿に関する記述は Cupid が「情欲」の擬人化であり、死をもたらず訓戒の目的で作られた存在であることも示している。このような死をもたらず Cupid の劇を Kingsley-Smith は “Cupidean tragedy” と称し、人間の調和を目的に人々を教化する Cupid の劇である “Love tragedy” を引き合いに、その特徴を以下のように述べている。

Kingsley-Smith によると、“Cupidean tragedy” として分類される作品は、*Cambyses* (1561)、*Gismond of Salerne* (1566)、*Tancred and Gismund* (1591)、*Cupid’s Revenge* (1608) の4作品である。この4作品に共通している Cupid の機能は恋人たちの破滅の動因となっていることである。これらの劇は不法な性愛や近親相姦的な愛を主題としており、それらは公私ともに登場人物たちに破滅を引き起こす。“Cupidean tragedy” の特徴として挙げられることは、欲望 (desire) とは根本的に反社会的なもので、死の代理人として想像されており、Cupid の敵を罰するために課されるものであるということである。ただし、正確な原因は必ずしも明確ではなく、恋人たちは処罰 (justice) あるいは復讐によって殺されることになる (Kingsley-Smith, *Cupid* 74-75)。

さらに、Cupid が引き起こす欲望とは親子の関係をも破壊する。父親たちは子供たちの欲望によって裏切られるが、父親たちも娘たちに近親相姦の感情を抱くことや、息子たちを恋のライバルとしてふるまったりする。より一般に、法の抑制に対する挑戦は劇の結婚の放棄によってあらわされる。正当

化されることない欲望を Cupid が押し付けるあるいは Cupid が親の反対を考案する。どちらにせよ、恋人たちの欲望は不法でありしたがって恥ずべきで破壊的なままである (Kingsley-Smith, *Cupid* 75)。

一方で、“Love tragedy” と “Cupidian tragedy” の相違点は、“Love tragedy” での主役たちは結婚を望んでおり、彼らの結婚はしばしば同情的に描かれていることである。“Cupidian tragedy” では結婚が無限の、確かな、破壊的な情欲を抑制するためには不十分であることが想定されていると Kingsley-Smith は述べている (Kingsley-Smith, *Cupid* 75)。

つまり、劇作において、Cupid は二種あったことがわかる。これは、Panofsky がイコノグラフィーで指摘していた「目の見えるクピド」と「盲目のクピド」の二種類の Cupid が存在していたように、英国劇においても “Love tragedy” を引き起こす Cupid と “Cupidian tragedy” を引き起こす Cupid が存在していたことになる。

2. *Gidmond of Salerne* の Cupid

前項で述べたように、*Gismond of Salerne* の Cupid は情欲、死、恋人たちの破滅、つまり “Cupidian tragedy” をもたらす Cupid である。ここでは、前項で述べた Kingsley-Smith の論を基に、*Gismond of Salerne* の Cupid の表象がどのように死や情欲と関連づけられているかを考察する。また、Cupid の表象が *Gismond* にも表象されていることを考察する。最後に、なぜ、法学院の劇作家たちは、*Gismond of Salerne* に原作の Boccaccio の *Decameron* には描かれていない Cupid を登場させたのかを論じる。

Gismond of Salerne の Cupid について、Kingsley-Smith は、処刑された Guishard の遺体から心臓が抜き取られ剣が刺されることから、Cupid を死刑執行人と同等であるとみなしている。剣によって刺された心臓のイメージは Cupid の力を示すよく知られたエンブレムであった (*Gismond* 212)。*Gismond of Salerne* において死をもたらす Cupid のイメージはこの場面だけではない。Kingsley-Smith は、“Cupidian tragedy” の定義として、欲望と死の動因である Cupid の矢の機能は今や、Cupid 自身がその役割を担っており ‘De Morte & Amore’ の機能は廃れていると述べている (Kingsley-

Smith, *Cupid* 75)。しかしながら、*Gismond of Salerne* においては、Cupid の矢の機能はまだ健在であり、彼の矢が死の表象として残っている。

先に挙げた3幕1場でのCupidの独白ではGismondにCupidが放った矢は、欲望の動因となっており、さらに、その欲望によって恋人たちの死が確定されていることを示している。

また、矢が死をもたらすことがTancredの台詞からわかる。GismondとGuishardの逢引きを目にしたTancredがGismondの寝室から出て、自分が眼にした光景を語る。この場面の冒頭からTancredは死を懇願し、裏切り者への復讐を語り、ようやく自分が目にした事の次第を述べる箇所である。

At her beds fete I sate, and this accursed hed
wth cortine close I wrapped: thát wold I had ben dead,
and shrouded wth my shete a sensless corps in graue,
my last and longest rest to take, as happily haue
those wealfull wightes, whom death wth frēdly dart hath slayen. ...

(4. 2. 53-57)

ここで述べられているのは、Tancredが娘と家臣の裏切りを知る前に死んでいればよかったという願望である。ここで注目すべきは、“death wth frēdly dart hath slayen” という言葉である。矢はCupidの持ち物であるが、ここでは“death”が好意的な矢で殺すというように、Tancredの台詞からもCupidに付随する死の表象が窺えるのである。

しかし、恋人たちはCupidが死のCupidであることに気づいていない。3幕1場でCupidがGismondにGuishardと会う方法を教えるとき、Cupidの目的が恋人たちにつかの間の楽しみを与えることにより、その後の嘆きをより深いものにし、救済さえない悲しみを与えることであるとCupidの以下の台詞から分かる。

The meanes to mete, her haue I taught, and she
by clouën cane shall do the earle to know.
So shall they ioy in tasting of the swete,
to make them iudge more felingly the grefe
that bitter bringes, and, when their ioy shall flete,

そして、自分の死で彼女の心が痛むことがないように、彼女の中の情熱を消すように Juno に Cupid を説得することを懇願している。これは、Guishard の Cupid に対する抵抗であり、死すべき運命にある Guishard から発せられた Cupid に対する警告でもある。

しかしながら、Guishard の願いは届けられることはない。なぜならば、“Cupidean tragedy” の Cupid は単独で行動しているからである。通常、Cupid は Venus と登場するが、Venus とさえも切り離されている。これが意図していることは Cupid の犠牲者の運命の責任が彼のみにあること、また、Cupid の犠牲者は仲裁者を失っていることである (Kingsely-Smith, *Cupid* 91)。したがって、Cupid の残酷さは強調されているように思える。このように、*Gismond of Salerne* において Cupid は死の表象であり、恋人たちを残酷にも破滅へと導いている。

This one hand beares vain hope, short ioyfull state,
with faire semblance the louer to allure:
this other holdes repentance all to late,
warr, fiër, blood, and paines without recure. (1. 1. 5-8)

1 幕 1 場での Cupid の台詞で示された計画通り Gismond は Guishard との逢瀬によって Cupid が片方の手に持っていたつかの間の幸福を得る。そして金の盃に入った恋人 Guishard の心臓を目の前に、彼の血と彼女自身が入れた毒とともにそれを飲み干す。つまり、この点が Cupid のもう片方の手に持っていた恐怖や血と一致するのである。

しかし、劇作において、Gismond は Guishard への欲望に後悔を示している様子はない。この点は、Gismond の不道徳さを強調しているだけでなく、Gismond を Cupid と同じように情欲と同一視させている。Cupid が恋人たちへもたらしたむなしい望み、つかの間の幸福と遅すぎる後悔と癒えることのない苦痛を Gismond は父 Tancred にもたらしている。そして、Gismond の情欲は Tancred 自身の死をもたらず。その点において Tancred にとって、Gismond は Cupid と同じ情欲と死をもたらず人物である。この劇作において、Gismond の表象が Cupid と同じであることを論じる。

Tancred の Gismond に対する父近親相姦的な愛情は 1 幕 3 場で夫の死を

嘆く Gismond への慰めの言葉の中に見出すことができる。

And though yo^r husband death hath reft away;
 yet life a louing father doeth susteine,
 whoe (during life) to yow a doble stay
 as father and as husband will remaine,
 with dobled loue, to ease yo^r grefe for want
 of him whoes loue is cause of yo^r complaint. (1. 3. 45-50)

Ernest G. Griffin が指摘するように、Tancred は “doubled loue” で父として、また夫としての愛を Gismond に注ごうとしており、彼女の夫にとって代わろうしている。そして、この場面での Gismond の Tancred に対する従順さは近親相姦的な動機のある父の求愛に賛同している (99-100)。このように未亡人として戻ってきた Gismond は父である Tancred に欲情をもたらしたということができる。

次に Gismond が Tancred に死をもたらす人物であることを論じる。Gismond 自身が Tancred の命であるということは、Lucrece が Tancred に Gismond を再婚させるように助言した際の Tancred の台詞に表れている。Lucrece の助言を最後まで聞くことなく、Gismond の再婚を拒絶した Tancred は Lucrece に Gismond への伝言として以下の台詞を言う。

Tell her, I am her father, whoes estate,
 wealth, honor, life, and all that is in me
 doeth wholly rest on her. Tell her I must
 accompt her all my ioy, and my relefe.
 Work as she will: but yet she were iniust,
 to seke to hast his death that gaue her life. (2. 2. 63-68)

この台詞は Gismond が Tancred の側にいないことが彼の死を意味していることを明白にしている (Griffin 101)。また、Lucrece は Gismond に彼女の父親によって再婚の申し出が拒絶されたことを告げるとき、Gismond に “that in yo^r hand / yo^r agèd fathers life doeth rest and stay,” (2. 3. 32-33) と言っている。つまり、Tancred の命は Gismond の手の中にあり、Tancred の死は Gismond にかかっているのである。しかし、3幕1場で Cupid が天

へと戻ったあと、Gismond と Guishard との性交渉を彼女の寝室で目にした Tancred にとって、Gismond は死をもたらす存在へと変わっている。

When I, as is my wont (such is my fond delight
to fede my self wth ioy and pleasure of her sight)

my daughter, now my death, wth in her chāber sought. ... (4. 2. 45-47)

先に引用した2幕2場での Tancred の台詞で表されているように、Gismond は Tancred にとって “all my ioy, and my relefe.” (66) であった。しかし、今や Gismond は Tancred にとって “my death” となった。Tancred は自分の悲しみを Gismond に以下のように訴えている。

... But neither I

can scape the grefe, whome thow hâst more thā slayen:
nor thow canst now recure the wound: for why,
neither thy chast and and vndefiled state
of wemlesse life can be restored to thee,
nor my cōfort, whoes losse I rue to late,
can till desired death returne to me. (4. 3. 6-12)

ここで述べられているように、かつては父の喜びのすべてであった Gismond はもはや、慰めとなる人ではなくなっている。これは Gismond が情欲によって Guishard と肉体関係を持ったことによって生じた結果である。したがって、Gismond は夫の死後父の元へと戻ったことにより Tancred の喜びのすべてとなり、彼に幸福な時間を与えていたが、情欲によって父を裏切り、父に癒えることのない傷を与えているのである。

さらに、Guishard の心臓を届けられた Gismond は、死を覚悟し、“Shall I not work some iust reuenge on him/ that thus hath slayen my loue?” (5. 2. 65-66) と恋人を殺した父に対して復讐をするかを自問する。しかし、彼女は自分の死がもたらす結果をよく理解している (Griffin 105)。

He by my death shall haue more woe. ...

.....

This shall therfore suffice, that I wiil dye.

My death his blood shall wreke against the King.

This hart and eke myne owne loe now will I
 within one tombe engraue, that so may rest
 my loue, my life, my death within this brest. (5. 2. 80, 82-86)

Gismond は自分の死が父の死の動因となることを知っている。そして、自分の死が父への復讐となることも理解している。父に復讐するために恋人の心臓と血が入った金の盃に自ら毒を入れ、飲み干すのである。恋人の心臓と血を飲み干すという行為は劇の冒頭での Cupid の “I drink the louers blood, /and eate the liuing hart within his brest.” (11-12) という台詞を観客に思い起こさせる。この場面では、死をもたらす Cupid の冒頭での台詞と同じ行為を Gismond が舞台上で行う。Gismond のこの行為について先行研究では、Cupid がもくろんだ悲劇の愛であることが儀式的に示されていると述べられている (Oshima 39)。しかし、Gismond が恋人の心臓と血を飲み干すという行為は、Gismond と Cupid の関連性を強調し、より明確に表している。また、Gismond と Cupid を同一視させているのではないだろうか。

このように、Gismond は作品の中で Cupid の表象である死、情欲を表す登場人物として描かれている。さらには、Cupid が自ら語る特徴と Gismond の Tancred に対する行為に類似性を見出すことができる。

では、*Decameron* には描かれていない Cupid を法学院の劇作家たちが *Gismond of Salerne* では登場させたのはなぜだったのか。最後に、この問いに関して考察したい。Cunliffe によると法学院の劇作家たちは、イタリア語の原文の Boccaccio の *Decameron* を基に *Gismond of Salerne* という劇を作っている (436)。しかしながら、Boccaccio の *Decameron* には Cupid は登場していない。原作にはない Cupid を登場させている理由について先行研究では、異なる視点から解釈している。

法学院の劇が女王への忠告や助言をする役割があったことから、Mary Axton は劇作が後継者候補であった Catherine Grey を支持する意図があったという見解を述べ、劇作家たちが Cupid を登場させている理由を誰もが逃れられない Cupid の力によって、恋に落ちて命を落とす恋人たちに同情の目を向けようとさせていたためであると主張している。Catherine Grey は女王の許す相手としか結婚できない状況であり、秘密に結婚したことによ

り女王の怒りを買うことになった。Catherine Grey の状況と Gismond の状況は類似しているという。さらに、悲劇の 4 幕初めには Chorus で自分の後継者である Gismond に貞節を強要し、結婚を許さなかったために後継者を失い、国を滅ぼしてしまう Tancred と貞節の女神 Diana が対比されている。4 幕を書いた Hatton は Gismond と Guishard を Venus と Adonis、Paris と Helena と同類とみなし、Hyppolytus や Diana の貞節な愛を支持している。神話の変形に講ずることにより、Diana が彼女の信仰を破った者に命を戻したことを私たちに確信させることで、Hatton は注意深く “the body politic” が奇跡を成し遂げることができることを示しているのだという (57)。

また、Perry によれば、*Decameron* の Ghismonda は地位が守られており、彼女への同情を生じさせる作品となっている。一方で、英国の劇作家たちは一貫して、彼女の道徳心の弱さを強調し、自制を損なったとして彼女の欲情に焦点を当てている。これこそが作家たちが暴政を行う Cupid の恐ろしさを演出することを決めた理由であるという。道徳的な枠組みでは Gismond のエロティックな欲望は、理性で抑制できなかつたと批判されるのである。また、Gismond の欲望を劇作の中で批判する一方で、Elizabeth 女王を貞節の女神 Diana のように模範的な貞節を持つ女性として称賛しているのだという (284)。

両者の主張で示されているように、劇作家たちは女性の貞節を支持している。彼らが Cupid を登場人物として劇に登場させた意図は貞節を守れない Gismond の欲情を明確に表すためであったと考えられる。また、Kingsley-Smith は、劇作家たちが Cupid を登場人物として描いた理由を 1532 年に出版された William Walter の英詩 *Guystarde and Sygysmonde* のような Gismond の物語の言葉の翻案を思い起こしたからではないかと述べている。この英詩は Gismond の翻案であり、Cupid の記述がある。そこでは Cupid は欲望と同一視され、中傷されているという (Kingsley-Smith, *Cupid* 78)。

しかし、Cunliffe の主張するように劇作家たちが Boccaccio の *Decameron* を英訳された訳本ではなく、イタリア語の原文を読んでいたこと、Axton や Perry が主張するように、Cupid により Gismond の欲望が強調されていることを考慮すると、劇作家たちは *Decameron* の中で描かれる Ghismonda

に表される欲情を読み取っていたのではないだろうか。Cunliffe は、*Gismond of Salerne* の1幕2場で Gismond が夫の死を嘆いている場面について、この場面は原作では言及されていないことを指摘し、英国の劇作家は原作の中で Ghismonda が彼女の恋人 Guicardo について嘆いている場面での1行か2行を彼女の亡き夫への悲しみに適応しているのかもしれないと述べている (PMLA 436-37)。この Cunliffe の考えを基に、*Decameron* を読むと、作品は恋人たち対して同情的に描かれているが、Ghismonda の情欲を読み取ることができる。

亡き夫の後家となり、父親のもとにもどった Ghismonda (ギスムンダ) は父親が自分を再婚させることは念頭にない様子を見て、父親に再婚の話をするのは自分の品位にそむくような気がしていた。「それでできれば誰かしかるべき男性をひそかに情人じょうじんに持ちたいと考えるようになったのである。どこでも宮廷はそうしたものだが、父の宮廷にも出入りする男は多かった。その中で、貴族であれ、平民であれ、誰か自分の眼鏡にかなう男はいないかと観察していた。」(『デカメロン』260)

そして、比較的身分の卑しい Guiscardo を見つける。彼も Ghismonda に恋をする。

女はどうにかして男と二人きりで一緒になれぬものかと思い憧れた。その情愛の気持を誰にも洩らさずに相手に伝えようとして、世間の人の思いも及ばぬ一計を講じたのである。手紙を書き、翌日一緒になるためになにをすべきかをしたためた。それを蘆あしの茎くきの管の中に入れグイスカルドに手渡して「今晚、この火吹きでもってあなたに仕える女中さんに火を吹いておやり。女中さんも火がついて熱く燃えるわよ」と冗談めかしていった。(『デカメロン』261)

訳注で平川祐弘は、蘆の茎を渡す際の Ghismonda の冗談は「かなりきわどいエロティックな含意の冗談である。誰かしかるべき男性をひそかに情人に持ちたいという考えといい、この冗談といい、第四日第一話の後半の女主人公ギスムンダのヒロイックな態度や性格と、整合性に欠けるように訳者には思われる。」(261) と訳注で指摘されているように、*Decameron* では、恋人たちに対して同情的に描かれているにもかかわらず、*Gismond of Salerne*

の Gismond と異なり Ghismonda は主体的である。Ghismonda は、Cupid の計画ではなく、自ら情人を宮廷内で探す。そして、自ら恋人と二人きりになる方法を考えだし、きわどい冗談を言う。これらの点を法学院の劇作家たちは、批判的に読み取り、劇作を書く際、Gismond の欲情をより強調するために Cupid を登場させ、死と欲情への訓戒を視覚的に表現したのではないだろうか。

結論

本稿では *Gismond of Salerne* における Cupid の表象について論じた。Cupid が死と情欲を表すことになった過程をイコノグラフィーとエンブレムの観点から考察し、イギリスの劇作に影響を与えていたことを述べた。また、Kingsley-Smith の論を基に、死と情欲を表す Cupid の影響により、イギリス・ルネサンス期の劇において“Love tragedy”と“Cupidian tragedy”の2種類の Cupid が存在することを確認した。さらに、Kingsley-Smith によって“Cupidian tragedy”のカテゴリーの一つとしてみなされている *Gismond of Salerne* の Cupid が死と情欲をもたらす Cupid であることを Cupid 自身の台詞と登場人物たちの台詞から考察し、死と情欲をもたらすという Cupid の表象が Gismond に与えられていることを論じた。最後に、法学院の劇作家たちが原作である *Decameron* に登場しない Cupid を劇作の中で登場させた意図について考察した。劇に Cupid を登場させた意図を Gismond の情欲を強調するためであるという先行研究での論を基に、*Decameron* での Ghismonda の台詞や振る舞いの中に彼女の情欲が表されていることを述べた。そして劇作家たちが Ghismonda に描かれている情欲を見逃さず、批判的に解釈して劇作に変更する差異に死と情欲を表す Cupid を登場させたという結論を導いた。イギリス最古の悲劇と言われている *Gismond of Salerne* で Cupid の役割と表象、さらには Gismond の表象についても考察したが、法学院の劇であるという側面から、劇作が担っている政治的役割については本稿では検討できていない。この点に関しては今後の課題としていきたい。

Notes

¹ 本稿における *Gismond of Salerne* の引用は、*Early English Classical Tragedies*. Oxford: Clarendon Press, 1912. による。また、*Decameron* の日本語の引用は、『デカメロン』平川祐弘訳、河出書房新社、2012年。による。

² 両作品の相違点については Cunliffe (*PMLA* 435-61)、Axton (56)、Oshima (37) を参照。

Works Cited

- Axton, Mary. *The Queen's Two Bodies: Drama and the Elizabethan Succession*. London: Royal Historical Society, 1977.
- Berger, L. Thomas, et al. *An Index of Characters in Early Modern English Drama Printed Plays, 1500-1660*. Cambridge: Cambridge UP, 1998.
- Boccaccio, Giovanni. *Decameron*, Nuova edizione, A cura di Vittore Branca, Einaudi, Torino, 1992; 『デカメロン』平川祐弘訳、河出書房新社、2012年。
- Chambers, E. K. *The Elizabethan Stage*. vol. 3, 4. Oxford: Clarendon Press. 2009.
- Cunliffe, John W. *Early English Classical Tragedies*. Oxford: Clarendon Press, 1912.
---. "Gismond of Salerne." *PMLA* 21.2 (1906): 435-61. *JSTOR*. Web. 13 Jan. 2016.
- Griffin, Ernest G. "Gismond of Salerne: A Critical Appreciation." *A Review of English Literature* 4. April (1963): 94-107. Print.
- Kingsley-Smith, Jane. *Cupid in Early Modern Literature and Culture*. Cambridge: Cambridge UP, 2010.
---. "Gismond of Salerne: An Elizabethan and Cupidean Tragedy." *Yearbook of English Studies* 38.1/2 (2008): 199-215. *Humanities International Complete*. Web. 13 Oct. 2015.
- Nelson, H. Alan and Hohn R. Elliot Jr, eds. *Inns of Court: Records of Early English Drama. Appendixes 2* Cambridge: D.S. Brewer, 2010.
- Oshima, Hisao. "Tragic Love in *Gismond of Salerne*." *University of Fukui Departmental Bulletin Paper* 39. (1989): 29-46. Print.
- Panofsky, Erwin. *Studies in Iconology—Humanistic Themes in the Art of the Renaissance*. New York: Harper Torchbooks, 1962; 『イコノロジー研究 (上)』浅野徹他訳、筑摩書房、2002年。
- Perry, Curtis. "Gismond of Salern and the Elizabethan Politics of Senecan Drama." *Gender Matters: Discourses of Violence in Early Modern Literature and the Arts*. Ed. Mara R. Wade. New York: Rodopi, 2014. 279-93.
- Wiggins, Martin. *British Drama 1533-1642: A Catalogue*. Vol. 2. Oxford: Oxford UP, 2012.